

歯科治療に恐怖心を持つ患児に対してトレーニングを行った結果治療への協力を得られた一例

○野中麻衣

医療法人社団秀和会 小倉南歯科医院

【目的】

歯科治療に不安や恐怖心が強く、ユニットにもあがれなかった男児に対して、いくつかの手法を用いてトレーニングを行った結果、治療への協力を得られた症例を報告する。

【症例】

初診時年齢:7歳1か月 性別:男児
 主訴:学校歯科健診でう蝕を指摘された。
 現病歴:他医での治療中、非協力で泣いていたため、小児歯科専門医を希望して、当院受診。
 全身所見:特記事項なし。
 口腔内所見:上下左右臼歯部にう蝕あり。
 A 晩期残存・唇側歯肉に瘻孔
 上唇小帯高位付着
 前歯部反対咬合
 ブラッシング状況:初診時PCRは58.3%。
 仕上げ磨きは時々している。
 家族構成:父(単身赴任中)・母・兄の4人家族。

【治療経過】

初診時より、体動はないがずっと泣いていたので、笑気吸入鎮静法(以下IS)を使用し、TSD法にてトレーニングを行った。IS効果は良好で、使用中は協力度が安定し、次第にTSD法なしで泣かずに治療ができるようになった。また、口頭で当日の予定を伝えても記憶に定着せず、「次は何をするの?」と絶えず聞いてきたので、絵カード等を用いて視覚的に説明したところ、質問の回数は減った。現在は、言葉での説明のみで治療を行っている。

【考察】

今回、患児を通して、治療に対する不安や恐怖心を取り除くための、ISや視覚支援の効果を学ぶことができた。定期健診に入る頃から、スタッフとの会話が増え、自分の気持ちを教えてくれるなど、信頼関係が確立されてきたと思われる。その結果、現在も来院が継続しており、新しく萌出した小白歯は、すべてシーラントを行えた。今後は、この成果を維持できるよう、指導を続けていきたい。

乳歯から永久歯交換期に患児と母親に行った予防の症例

○高尾美香

くすのき子供歯科

【目的】

疼痛を主訴に来院した患児の3歳8か月から現在11歳6か月まで口腔内管理を行った症例について報告する。

【方法】

初診時はカリエス治療を優先し母親には保健指導を行ない、カリエス治療終了後3か月毎の定期検診に移行した。交換期より予防を積極的にして、口腔内の状態が悪くなった時期は再度患児に対しては、歯垢染色液を使い磨き残しのチェック、フロス指導を行うとともに患児と母親に対して間食などの生活習慣を聞き取りと、保健指導をした。

【結果】

3歳8か月より、カリエス治療と口腔内管理をするが、7歳頃までカリエスの発生を繰り返した。交換期になり予防を積極的に行ない口腔内の状態はよくなり、永久歯にカリエスは無い。10歳6か月頃より、生活環境の変化で上下顎前歯歯頸部、上下顎小白歯歯頸部に脱灰を認めるようになり、現在定期検診と保健指導を続けている。

【考察】

母親も患児も指導内容を理解し実践してくれた。その結果口腔内の状態はよくなり、現在カリエスは無い。学童期になると口腔の健康管理を自身で行うようになった。その後10歳6か月頃より、脱灰を認めた。原因は固形のおやつは食べないが甘い飲み物をガラガラと飲んでいて、ためと考えられる。定期検診で脱灰を、早期に発見できたが抑制していくことは難しく、プラークコントロールと生活習慣の改善が現在の課題である。今後も年齢、生活環境に合わせた口腔内管理が重要であると考えられる。